



ワキ方、鞍子方へは勤め料を出してやつてくれ、市分や地議の者は不用と市の其筋へ傳へるようとのことでした。私がナゼと云ひますと先代の清藤は京都の博覧會にコケラ落しに出てくれと云はれて京から飛んで行った。ワシも京都を勤めての歸に濱へ立ち寄る。奉仕の場合は絶對に金品はお歸りする筋が下がるからと云はれたのです。市では大變縮んで記念に贅時計と銀の押指大の腰下げを贈つたと記憶して居ります。有馬 曲舞一觀世では亂曲の稽古を始めた時でした六之坂師は今日の本を拝見しては喜んで下さる。おさらびだけ何ひます。その云はれて見ると曲舞の時必ず本を拝見したのです。

本で澁州をチヨオシウと發音される朱書まで見ました。樂を大切にすることは同じです。有馬 觀海の問題は友人の先生方にまかせて我々は樂しみで居る。お五ひに胸襟を開いて話合ふことですね。横濱はコソナに伸よく語つて居ると全國へ手東、私が字都管へ行つた時でした。諸會がありまして。觀世の地には梅若は出るナと幹事が云ふので、元々同じ流派だつたのだからと云つて語つてやりました。地方では前々からの事情を知らぬ人が指導的立場にあるから困るのです。

會長のお宅へ左近師一行が來られて新年會がありました。新年會は昭和十一年から十年で、昭和十一年の折からは會長の宅は知つて居ます。上も聞きまして、清水 横濱はもとと大六の地盤でしたからね。茂木さんが没なられて袖付の放送で、私も放送へ入りまして、處が見本です。オヤと思つて、あつて聞きますと、放送は全國で同好者が集んで居る。若し一寸の間遊びでもあれば、家元として同好者は勿論、祖先に対して申訴が立たぬからサ、と。

其後、宮中のお目出たが、一萬三郎師が復歸り、萬三郎師でしたが、矢張り見本でした。正徳の稽古は火したものだと思ひます。其の前後、梅若新太郎、先代一さんが稽古に見えられたと母がよく申して居ました。清藤師に稽古をしてか、品川の海岸寺で、お實さんの銅像が出来たのか折扇をもらつて父が参列したことも覚えて居ます。清水 今は困難だと云へばそれ迄ですが、アツサも梅若の名聲は落ちはしませんよ。他流でも、宗家以上に同好者が認めて居る人は随分あります。養生の野口さん、金奈の櫻間さん、養院賞を受けたのは野口さんの娘で、小笠原 諸本では高佐世さんも随分がんと張つたらしくです。有馬 翁さんが僕をす

るのに六之坂さんに度々話かけるので、梅若新太郎、萬佐二人で梅若へ歸ると云ふのならと言つて居るらしいです。矢島 さん人から、横濱で能樂曲連盟を作つたのと云ふ話がありました。観梅双方をうまくまとめられる人が出るなら成功するが、それがないと市は骨折損だから、やつても無駄になると思つた。小村 觀世系は横濱へ稽古に見えて居ます。宮代さんの所へ山階信仰師。第二巻へは淺見重吉師の息重信仰、豊津田、坂井普次郎師、梶木副師、會長は今井師ですか、交はしたと云ふ話です。鳥澤、清水各師の宅へは、接稽古に行かれる方は相當あります。藤澤、鎌倉、夏子、葉山、大分出張して居られます。小村、他流では會長金奈の本多師が、常任の宅へ見られます。金剛の植師は鎌倉方面から出たと聞きました。喜多は補添さんが没せられたので連絡がつかせ

各流派皆さんで分擔して居られますので出張はつきりすると思はれます。有馬 オヤもう二時です。休ませよう。會長 では又、何れも朝夜が明けました。六時半だ。朝食が済むと又一段と朝花が咲く。一ハリ鳥の女が立つて放水と矢島さんが一同を笑はせる。何しろ頭へ石油桶のものを載せて居るのですから姿勢は好い。會長 親父が仕舞の稽古をよく言つて居りました。シンパリ棒を手中へ立

清水 それも聴きたいので、一とらなり始めませう。一問殘月莊に移る。景清 シテ鳥島氏、六十五分。續いて班女して手東氏、四十五分。食事の用意が出来たと知らせる。留めの一瓶。シテ清水氏、ワキ

小笠原氏三十三分 これで豫定通り全部諸ひ終る。有馬 九月二十六日は總持寺で梅若の懇談會が予定です。よろしくと手東氏が會計の始末を話して居る。一回禮を云つて解散。時に午後三時

素語會豫告

期日 拾貳月拾貳日(日) 午前九時より 場所 鶴見總持寺 一 豫定番組 (喜多) 巴、千手、通小町 (金奈) 小督、富士太鼓、船辨慶 (金剛) 土蜘蛛、草子法、鶴鶴 (養生) 鼓盞、羽衣、鉢木、紅笠狩 (梅若) 山姥、寶盞、井筒、舞丸、小袖會我、竹生島、筋細、松風、景壽、天鼓、安達原、獨唱、連吟、仕舞、當日租入 番外諸先生

謡曲の眞味

田邊定吉

謡曲を西に見た、のたくり伸びた種の大木の根本の物置から、琴打歌や、鼓拍歌、種には義大夫、四としては面白い。ロマンスがあるが、然には唯、色々の音楽をあきつた新果、終に謡曲の道に進み、眼があらうが無からうが、稽古は缺かきず、終に大俗に謡曲拾年、仕舞三年と云はれているが、まあ其の位やれば、宛知することが出来ると云ふ意味で、卒業と云ふには未だ程遠い、源平物語等と並んで文様が現代と係りか、離れているの、簡拙も難解である、其の意、味も文學的に研究した人、先先生がきて、青年に小話を教へたが、段々、人にもなかり、其の當時としては、我が父の、僅かに語る程度で、

ければ六づかしい掛け言葉を理解することは出来な。即意味深長な文學と微妙な音楽の連綿とを味ふことは、容易ではな。然し其の熱心と年數によつては、其の妙味を會得し得ると云ふことは云ふ迄もない。片かじりでは何にもならない。茲に一面に於ける修業の一端の現れとして一例を擧げるならば腹の出来ると云ふことで精神論には落付が生じ、少くも子儀の頭を張つたり、妻女を叱り飛ばしたりすることはなくなる。亦腹の昇ることとで弾力を増し、試に上向に變て腹の上に子儀を得ることだ。腹が血行を良好にするとは、醫學上も認めるところである。但血脈の人はなどは、醫術の心算があるかも知れないから之は注意すべきだ。兎に角文學的に、音樂的にも、唱し得る頃には精神向に肉得的に各種の云ひ知れぬ、妙味が湧いてくる。仕舞や唯物を合せ暗めば荷更のことであるが、夫れは仲々容易のことではな。左に謡曲拾三徳を掲げて讀んでみる。

- 謡曲拾三徳
- 不祈得神護 不老説古事
  - 不悟知佛道 不観知戰場
  - 不到察靈地 不嚴威儀整
  - 發聲散歌道 坐而望月遊
  - 自知和歌道 不思被人教
  - 交友能和睦 無友慰閑居
  - 旅行得知己
- (昭三、八、二三、稿)

# 觀世 謠本通覽

梅若 中村 桃山

天保十一年出版の觀世人に語りて二百餘番の流謠本は、内百十番、外六條審議を發行し、歲月を十二番、別能二十八番、関すること正に五年。云々大体が五番綴で、内二十番とある。而も編者觀世二册、外十番綴、別六册、左近、參與觀世鏡之政、であつた。二十三世清藤梅若方三郎と。

梅若方三郎と。次に梅若本であるが、露、笛の巻、木竹、梅、全四十册で、末巻四十は曲仲光、高野物狂、菊蕪童、舞、世九は、安巻、正章を加へて計百八番とす。

二十四世左近太次元滋は、大正拾年大正改版を廿四が初巻、第一巻から發表した。以上の外、新第廿三巻迄の平物が百六作大典を加へてある。次拾五番、習物廿七番計百九十二番である。

梅若流謠本解説は昭和十一年に出来て居る。これに依ると、第參次の改訂が昭和大成版である五番綴を全部組替へて、四十一册、二百五番とし、外に、神歌、大典、蟬丸の參番を一冊本とし、笛之巻を橋辨慶の小書として併合したため二百八番である。大正改版、昭和版には、觀世流謠曲正本解説が夫れぞれ附加されてあるが、大成版には未だない。

第一巻の前附に「分家鏡之政、長老梅若方三郎の歸參を見るに及び、兩

一、地拍子のとり方比較 一、面、裝束附等より來る曲是の主張等として、昭和の決定版と最近のもので、觀世流之が附附を訂正し明治四十年初版のものを大正五山崎樂堂、拍子附を訂正、觀世流改訂本刊行會で、簡附様式を統一し更に充實したもので現に喜之系統の使用書となつて居る。五番綴の組合は新物以外は天保版と同一である。

梅若が刊行會の本を用ひて居た時代もあつた。それは、清之が、一時梅若實の養子となり梅若六郎と稱して居つた爲でもあつた。

一、簡附の異同 一、面、裝束附等より來る曲是の主張等として、昭和の決定版と最近のもので、觀世流之が附附を訂正し明治四十年初版のものを大正五山崎樂堂、拍子附を訂正、觀世流改訂本刊行會で、簡附様式を統一し更に充實したもので現に喜之系統の使用書となつて居る。五番綴の組合は新物以外は天保版と同一である。

## 横濱金春流消

戦前は、神奈川県内の流津浦金春會、古河常氣の友會員を糾合する神奈川古河金春會、其他金春會、縣金春會が、年二回流津浦金春會、横濱秀慶會、會を盛大に開催した外、等々が夫々多數の會員を擁する。東芝堀川工場のマツダ推して賑かに例會を催ふ金春會、東芝鶴見工場の

一、面、裝束附等より來る曲是の主張等として、昭和の決定版と最近のもので、觀世流之が附附を訂正し明治四十年初版のものを大正五山崎樂堂、拍子附を訂正、觀世流改訂本刊行會で、簡附様式を統一し更に充實したもので現に喜之系統の使用書となつて居る。五番綴の組合は新物以外は天保版と同一である。

## 文化能藝連絡會

八月二十二日午後二時から湖南金澤の八景莊に於て、横濱市古典文化の連絡會が催された。

三曲、お茶華道、舞踊

澤城月明會賞奉 花間忽見式勳人 雨飛千央製音 力 鈴鹿山頭誠東神

羅袖懸松散異香 麗人來衣謝漁郎 春風嬌々雀琴 樂 天女入霞翔似鳳

職分	氏名	流派	住
名譽會長	石河京市	西區老	
會長	中村桃山	觀世神奈川	
副會長	上保慶三郎	寶生藤澤市	
理事	梶木泰一	觀世鶴見區	
	庄司清夫	梅若中區本	
	三村健彰	觀世金澤區	
	黒澤民雄	西區東	
	清水保治郎	鶴見區	
	有馬純直	梅若同區	
	塚原實	金春西區老	
	大川重吉	觀世磯子區	
	小村憲治	同區	
	輕部三郎	保土ヶ	
	山田憲藏	同區	
	宮代彰	神奈川	
	加瀬忠次	同區	
	高津郷美	南區北	
	中島柳	同區中	
	矢島禧一	同區東	
	石河靜江	同區南	
	横山フキ	同區西	
	小川雅雄	金春中郡大	
	伊藤集博	同區	
	竹内エイ	同區	
	新堀源兵衛	寶生南區	
	原憲	金春神奈川	
	小笠原儀三郎	梅若鶴見區	

理事	眞島彦次郎	梅若鶴見區
同	萩原康平	同 區
同	能切タマ	同 區
同	田仲哲藏	南區大
同	手東喜則	金澤區
同	關口良民	神奈川
同	生沼春子	株式會
同	大下壽一	同 區七
同	吉田仁吉	西區老
同	蛭川美雄	横濱市
同	丸井通	磯子區
同	佐野 盛	南區大
同	佐野 萌	磯子區
同	木村鐵治	同 區
同	岸水茂雄	磯子區
同	塚田榮美	西區戶
同	小泉進吾	同 區
同	齋藤有弘	鶴見區
同	松山長昭	磯子區
同	守屋與四巳	神奈川
同	松村利雄	同 區
同	川田林太郎	磯子區
同	田邊定吉	觀世
同	氏名	中區豆
同	流派	住
同	網島 環	金保土々
同	伊藤美郎	梅若金澤區
同	及川芳雄	同 區
同	勝野安吉	同 區
同	高橋鐵雄	同 區
同	山田正一	同 區

同	須藤アサ	同 區
同	須藤 求	西區老
同	梶 吉一郎	鶴見區
同	原田親一	東京都
同	内藤三郎	南區中
同	高島茂子	同 區
同	成田大湖	西區老
同	本田左伸	南區南
同	増田喜美子	同 區
同	海老塚國子	西區紅
同	藤原千代	港北區
同	相原彦造	中區山
同	山田はる子	南區弘
同	渡邊正之助	横須賀
同	石井與一	金澤區
同	古瀬友雄	平塚市
同	富森光雄	同 區
同	鈴木三輪治	中區野
同	美松寛海	同 區
同	横島保雄	南區大
同	佐野光子	同 區
同	佐野美和	金澤區
同	豊泉正藏	南區永
同	秋田新三良	港北區
同	藤田秀雄	市轄住
同	大畑 稔	同 區
同	有田幸夫	南區三
同	得能正博	東京都
同	高野仙太郎	神奈川
同	高橋 治	金澤區

同	岩本鐵次郎	同 區
同	菅原 勇	東京都
同	宮下善一郎	磯子區
同	和田 亮	鶴見區
同	宇田亦四郎	磯子區
同	岸本爲吉	神奈川
同	柄内百代	同 區
同	川口勲藏	同 區
同	前田 實	鶴見區
同	福井政之介	觀世
同	阿部ヤス	西區紅
同	成田小太郎	神奈川
同	中澤麻子	同 區
同	楠部孝子	同 區
同	柴野富美子	中區打
同	北村梅子	港北區
同	長澤和江	南區南
同	石井春子	西區御
同	後閑 敏	中區藤
同	淺井藤吉	磯子區
同	飯田耕作	神奈川
同	石川健治	東芝厚
同	田中 武	磯見區
同	塚原 聰	神奈川
同	平田晴子	西區老
同	齋藤アツ子	南區上
同	長谷川清司	同 區
同	辻 茂	東芝社
同	赤堀彌作	同 區
同	河田林太郎	川崎市
同	清水みゆき	東京都

同	中山富久	横濱市
同	余子定治	鶴見區
同	八子 修	五橋
同	中西光雄	東洗
同	吉田 力	同 區
同	水野敏男	同 區
同	川村正次	同 區
同	小笠原 儀三郎	同 區
同	泉 卯之助	同 區
同	花村俊一	同 區
同	杉野 博	同 區
同	岩田巳代子	同 區
同	箭柏行男	同 區
同	坂本忠一	同 區
同	福田 勇	同 區
同	佐々木健司	同 區
同	島田順吉	同 區
同	山内芳助	同 區
同	大田今朝由	同 區
同	永田安夫	同 區
同	南部種吉	同 區
同	村田一夫	同 區
同	神野朝光	同 區
同	坂垣一雄	同 區
同	越前榮三郎	同 區
同	吉澤治郎吉	同 區

幹事

少しも良心的なものと考えて編集委員は研究記事を持ち、名義の宛先に意を用い三〇〇部の印刷を泰仕的にやつてくれるところを探している中に涼風が立ち大奮をま近に迎えてしまった。のびのびの點あしかばす切にお許しを乞う。(NZ)